



1

1951年1月
倉敷昆虫同好会

創刊号

倉敷昆虫同好会の発足を祝って

深谷昌次



私は郷里の高等学校に在学していた頃、同好の青少年と共に昆虫同好会を作り盛んに採集をして廻ったものである。皆熱心で誰もが将来昆虫学者になりたかった。所がそれから20年近くを経過した今日同好の士の中で虫を本職とするものといえは私位のものであとは銀行屋さんのお医者さん等になってしまった。その同好会は3〜4年續いて絶えてしまったがこの間何人かの人々が自然に親しむ機会を持ったということは幸いだったと思う。

今度倉敷に出来た同好会は皆で協力して是非とも永續させたい。そして一人でも多く虫を愛好する士を世に送り出すよう願って止まない。この会の会員中には既に社会的地位の固まっている人々もあるので、かつて私達が作った会と違い必ずみのり豊かな成果を収め末広がりになつてくれるものと期待している。

倉敷昆虫同好会に就いて

20. I. 1951

山川東平

倉敷昆虫同好会はその名の示すように倉敷市を中心とした昆虫の同好者によつて組織されています。そして多くのこうした会に見られる一人または少数のリーダーによつて特色づけられたファッション

的団体とは趣きを異にし、一人一人の研究者が集つて互に便宜を譲り知識を交換し研究業績を累積に行く場として生まれたものであります。この会の生まれるにあつては、薪はなげこまれていたとはいへこれに火をつけるのをとられた青野、小野、白神、友野他8氏に對しては感謝のほかありません。どうか会員一同の力で冷めかけたばかりのこの会を正派に榮え成長させたものな

倉敷に於ける2・3昆 虫の方言

青野孝昭

昆虫、特に僕達が子供時代に良い遊び相手になるものには、地方地方で同じ種のものに対して異なる方言が付けられているものである。蟻地獄の方言名は柳田泉氏により日本各地のものが良く調査されているが、この様子は熱心な研究者が又何時か色んな種に入って広く日本各地の方言を調べられることがあるだろう。そう言う時に自分の郷土のものが資料不足から取残されていると何か一筋の妙見りなさを感ずる。そこでそういうことのない様に自分が生まれ育ったこの鳥取県の昆虫で子供に良く親しまれているものの呼び名をここに書き留めて置こうと思う。

子供に最も親まれるものは何と云っても夏の昆虫であろう。強烈な太陽の下、最もトノサマバッタを追い、エシマコオロギを採るとこの類は纏る蝶々、想おは墨を塗り、けれどもこれ等の一羽に於いては僕達は知っていた。トノサマバッタもカルマバッタも唯バッタと呼び、又エシマコオロギも他のコオロギも唯コオロギと呼んだ。なんでもシショウゴウバッタは此種をハタオリス又はハタハタをそれガキキキキと音を立て、延びるところからキキキキと呼んだ。酒温へ行くとギリギリスが居てそこへ行くのは僕にとって大変楽しいものであった。ギリギリスは鳴声がケレンスと云った。その上この虫はひどく噛みつくので恐ろしくて手が出せず取っては貰っていたものである。スズムシやマツムシも父にセガんで飼われて貰ったがこれらは虫屋で買っている通の呼び名で、別に取上げる意味もない。夕方静かにその鳴声に聞き入り、時の経つのも忘れれたら、日が暮れると電燈を点けて色んな昆虫が集まって来たがそれ等の中にジージーと呼んだドウガネズイガイが目についた。トノボ類も子供と殊に親しいものであるが、ナツアカネ、ボコトンボ、ハコトンボをカツキヨ、ゲンヤ

シマを唯ヤシマと呼んだ。7月の頃から蟬取りを始め、近所の子供達と一緒に行くので、世の間の如く最も早くは蟬取りだ。年上の子供達が持つもち棒で早く虫を捕るようになつて見たかったものだ。それから小は夜ふく半と成ると自分が下の子供を連れて蟬取りに行く様になる。七夕様もすると普通の家庭では竹を川へ流していたが僕達はその竹を蟬取りにしたものである。だから七夕様はそう云う意味でも待ち焦れられた。暑い日は汗を流しながらもち棒を肩に蟬取り山へも行った。蟬取り山へ行くにはかなり距離もあり、又山では又蟬を採れるも獲れた。レカレ蟬取りの経験で、その能力が他の降虫より遙かに勝つたいたのである。蟬では大きくて翅の透明なクマゼミが一羽獲つた。シャーンと音がそれから取れた時には非常に満足を感じ、帰りに同じ年頃の子供を見せると驚かすくらいわざと鳴かしたものだ。アブラゼミはマツリワ、ニーニーゼミをチナーンと云った。この二種は虫がこが黒くなった蟬取れた。虫は多くの蟬を知らなかつた。暑い日の午後道路に打水をした後等よくアゲハキヨウが飛んで来たがこれをオブリキョウと呼び見付けたと直ぐ網をひきつけて追っていた。水面にはオオミズスマシやアメンボが居て何時でも僕達の目を楽しませて呉れた。前着をノーメンコン、後着をゾーカイと呼んだ。

僕が小さい頃一緒に遊んだ虫達は今思い出せるものをざつと書くとこの位だ。こういつた他者娘持の呼称が小さい子供達の間で次々と傳へられ、今なお現在の子供達が同じ呼び名で呼んでいるのを聞くにつけてあの頃の自分が思い返されて懐かしいものである。(1951.1.19 書)





☆カミタリ飼育について☆ 友野良一

一昨年? 鶴形山の森、木でカミタリの幼虫を取った。これ飼育しようと思い、木と葉に持って歸った、これはおいたらはい出てしまうので「断尾虫」に書いてあったノコズで飼育しようと思い、木をノコズ引き棒30cm長さ15cm位のビンへノコズを少し入れその中に幼虫又ノコズを入れ少し水でしめてふたをしておいた次の日見ると食べているのでそのままにして食べるだけ次いでやった、これでは乾燥

するので水で時々洗った。その日ほど頭になつた。それから一ヶ月経てナカゴマフカミタリが出た、機の場合はノコズも作つたのだが松葉の様に乾燥所に行けばいくどもある様子の食す様であれば簡単に好くと思う、又この方法ではビンでやるので中を見せずに観察出来る利点もあると思う。一匹だけの飼育ではよくわからないがこの方法でも飼育が出来そうなのでお奨めします。

●アサギマダラ

昔の事は忘らぬが、この蝶は左野牧君(倉敷東中学校2年生)が鶴形山で採集して来て私の目で見張らせたのが最初である(1949年10月16日)。翌年私は福山でその優等を取れた。ところが昨年、尾崎年彦君(倉敷東小学校6年生)が、日 日福山で採集したのを初めとして、同君の野矢を訪問し、附属中学校の本瀬君等の観察日記で見つけられる時、密教にも到着した。又尾崎君はその後福山で2匹見たといっている。しかしこの蝶は平地では見られぬのか知らぬが、私の見聞の甲には10月以後のものばかりである。(白神昭)

●アサギマダラ倉敷産地追加

1951.1.19

アサギマダラの倉敷附近の産地としては鶴形山及び福山、帯江等が記録されているが1950年9月23日倉敷附近黒田に於て採集したヤマトアサギ1頭(完全)を採集した。また同じく1950年10月8日同所に於て採集した本種より少し1頭を採集したので、これに倉敷附近アサギマダラ新産地として黒田を加えておく。

なお本種を福山に於て1950年10月8日に採集したので記す。(松瀬義躬)



おとしみ
昆虫短信集

●電燈に飛来したアカタテハ



12月16日7時頃1匹のアカタテハが居間の電燈に飛来した元燈台で月がなかなかなるまで居た。これはアカタテハが冬期に飛来したと云うことはわづらひなもので報告しておく。その日は二所所有の出口もあけられていた。なおそのアカタテハは早くして一箇月をへた今も生きているという事を記す。(小野悦夫)

●モンシロチョウ電燈に飛来す

蝶が電燈に飛来することは多くの目撃者によりかたがたの様に報告されているが、こゝに筆者が目撃し得たものを報告する。1949年7月8日。時。午後7時55分。あたりは月面に包まれ、暗い。但電燈下の電燈にモンシロチョウが飛来して来た。かなり飛び回した個体だった。標本筆者保存。(青野孝昭)

●鶴形山公園で採れたヌミナガシ

1949年の8月29日、最初 白神君が、数匹のヌミナガシを吸飲中の本種を発見し、その蝶を捕獲した。翌日私は同所へ行つて見た。その際

偶然にも再びそこに居るのを発見、捕獲した。可也破れかじられていたが、おそらくこれは倉敷では最初の成虫で珍らしいことである。なおその後広島県倉敷市一宮、やはり同所で捕獲した。だがこれらの発生地が既に倉敷かどうか疑問である。

●蝶3題 (小野 洋)

クロツバメシジミは岡山県に多いそうであるが、当倉敷ではあまりないというほどでない。稲山に少数と鶴形山の南側で少々発見出来る。

オナガアゲハは現在近畿数地方では採られなもようが、い様であった。本種は山地に多いもので、昨年9月18日私は稲山のカラダキで本種の幼虫を一匹採集、飼育の結果、昨年4月20日見事に羽化した。

イタモシジキヨウモ山地には多いものであるが平地では倉敷では少なかった。1948年秋頃から北部山地(黒田、稲山等)で本種を見ようになり、1949年には1個体採る(倉野君)ことが出来たが、昨年は可也多く発生し、又採集されるようになった。(小野 洋)

●モンキアゲハ倉敷に産す

南方系の鳳蝶として知られその分布は海岸沿いの暖地に限られているモンキアゲハ *Papilio helenus niconicola* BUTLER は従来倉敷地方には記録がなく、しかも倉敷より北部の阿曾峠に産した近所の天城、徳島県でも記録されており、筆者も不思議に思っていたが、先当地方に於ても本種を2回にわたり2頭を採集するに目撃したのでここに報告する。

① 1950年8月8日 倉敷附近黒田伯備線駅東附近に於てクサギの花にたわむれる本種夏型♀1頭を発見採集した。個体は両翅共に尾状突起を欠き不完全であった。標本は筆者が所蔵して居る。



② 1950年9月23日 笠岡市山手村稲山に於て前羽の新鮮な♀1頭不明の1個体を目撃したのである(1951.1.19) (広島数第)

●ジマコウアゲハの一産地消滅

倉敷ではよく知られている本種の本産地が数ヶ所ある。

本種は他のアゲハと比較して保卵力弱くその発生地へ行けば大抵と大抵成虫も容易に採集出来る。

これらの採集地の中、笠岡市附近の山と笠岡市小宮町附近は有名であるが、前者は特にすばらしい採集地であった。ところが昨年から運動場建設工事で、その前側の垣根にカラダキと共にあつたウツノスズクサは成虫には何れも運動場につぶされて、運命もカラダキと共に、成虫でも大に絶滅したのである。採集も近づく絶つたので採集できなくなった。実に惜しむべきである。(小野 洋)

●セグロツノカメムシの卵保護

卵を保護するカメムシは成虫で冷日産に記録のあるものはモンキツノカメムシ(灰野, 1926, 長谷川, 1948)と、セグロツノカメムシ(栗谷, 1949) (新鬼虫, Vol. 2, No. 4) だけであると思う。私はセグロツノカメムシ (*Elasinucha putoni* SCOTT) と同属のセグロツノカメムシ (*E. ferrugata* (FABRICIUS)) にて此の習性のあることを発見した。即ち1950年9月25日に鳥取県大山の火鉢堂附近である産地(産地が不明)の葉表及び葉裏に産下された卵の上に成虫の静止しているのを3頭見つけた。これを成虫収容瓶に入れて持ち帰った時、すでに一卵は孵化していた。他の2卵も徐々に孵化して来たが、湿度不十分のためか孵化したのみで、死亡していった。又成虫はその後数日経過後に

★倉敷昆虫同好会会員住所録★

会員番号 氏名

- 1 青野孝昭
- 2 阿部 智
- 3 小野悦夫
- 4 小野 洋
- 5 近藤光宏
- 6 佐々木 修
- 7 白神 昭
- 8 友野良一
- 9 広瀬義躬
- 10 森下光雄
- 11 山川東平
- 12 山本智範

役員の方 (1951年1月現在)

顧問の先生

代表者 山川東平

編輯係 青野孝昭
 山川東平
 白神 昭
 友野良一
 小野 洋

会計係 友野良一

連絡係 青野孝昭

倉敷市大原農業研究所

農学博士 深谷昌次

昭和26年1月22日印刷

昭和26年1月23日発行

編輯兼発行人 吉野山川白神野

印刷 小野

発行所 新川町倉敷西小学校理科教室

非賣品 会員配付